

佐々木毅著「政治学の名著 30」ちくま新書 筑摩書房 2007年4月10日刊を読む

ハイエク『隷従への道』(1944)―計画化反対論と自由な社会の擁護―

ハイエク(1899 - 1992)はオーストリアの経済学者。『隷従への道』で社会主義、ファシズム、ナチズムが同根であると批判。

1. 民主勢力側の「目隠し」現象

- (1) 全体主義の台頭は自由主義の端的な危機を意味したが、枢軸国と戦う民主勢力の側は本当に全体主義とその肝心な部分をなす社会主義の影響から自由なのか。

ファシズムやナチズムは社会主義に対する反対する動きと解釈され、両者の差異や対立がとかく強調されているが、両者は同根を共有するのではないか。

実際、民主諸国において影響力のある人々はことごとく社会主義者ではないか。

それでは一体われわれは何を相手に戦っているのか。

「目隠し」現象の問題性を告発。

思想的に見てこの奇妙な状態を自由主義本来の立場に立ち返って一刀両断する。

- (2) 19世紀の後半以降、自由主義の教説に対する批判が高まる一方で、ドイツの諸思想が他の国々でも大きな影響力を振るうようになった。

これらのドイツ思想は個人主義、自由主義、民主主義の「西欧」に対する軽蔑感を内包していた。

これらは「浅薄な」ものとして拒否された。

こうしてヨーロッパの近代の発展を支えてきた自由主義に対する批判が各方面から強まり、進歩派を中心に不満が渦巻くようになった。

- (3) それに代わって登場したのが「自由の計画化」といった取り組みであり、市場という匿名的な機構を捨てて一定の目標に向かって社会的な力を集団的、意識的に指導する試みが唱えられるようになった。

かくして経済的自由の放棄のシナリオが動き出したのであった。

その上、社会主義は巧妙にも「欠乏からの自由」といったシンボルを駆使し、社会主義はより大きな自由を約束するかのような印象を用い、自由主義者の間にさらに浸透していった。

これは社会主義と自由主義との差異について「目隠し」をする典型的な例であった。

しかし、他面において共産主義とファシズムとの類似性が頻繁に報道されるようになり、それとともに両者の真の敵が自由主義であることが一層明らかになってきた。

こうした中で社会主義と自由とが結びつくと考えるのはますます困難になっているし、「個人主義的社会主義」とか「民主的社会主義」とか呼ばれるものの内実を十分吟味することが必要である。

2. 計画化について

(1) この両者の間に楔を打つ思考実験を始める。

社会主義の理念や目的を支持する人々は社会主義を達成するために必要な方法——私企業の廃止、生産手段の私有の廃止、中央計画機関による「計画経済」体制の創造など——を受け入れるのであろうか。

このように「方法」に議論の焦点を絞る。

さらに言えば、ここでの「方法」としての計画化は単に計画一般の主張ではなく、あくまであらゆる経済活動を単一の計画、すなわち、社会の諸資源が一定の仕方で特定の目的に役立つには、どのように「意識的に指導」すべきかということの規定した単一の計画に従って、中央機関が指導することを意味する。

これこそ、社会主義者が念頭に置いている計画化である。

これに反対する立場は自由放任主義だけではなく、競争のダイナミズムを活用し、強制の介入する余地を狭めることを主張する立場もある。

しかし実際のところ、この種の計画化論は何よりも競争に対する敵意に根拠を持っているのである。

(2) 次いで、計画化の「不可避性」、計画化と民主主義、計画化と法の支配などについて論じ、計画化と自由との緊張関係を具体的に指摘する。

また、計画論者は意識的な指導は「単に」経済的な事柄に限られるのであって、他の自由はそれによって何ら影響を受けないといった議論をしているが、これはきわめて危険な議

論である。

それというのも、経済統制は単にわれわれにとって二次的なものの統制にのみ関わるわけではなく、われわれの目的のための手段を統制することになるからで、それは結果として満たされるべき目的についての判断をするに等しい。

従って、経済的事柄の統制はわれわれの目的の統制につながり、全生活の「意識的な統制」へと変貌することになる。

結局のところ、「選択の自由」は虚構となってしまう。

煎じ詰めれば、競争社会では価格を払って目的物を手に入れることができるが、計画化がこれに代わってもたらすのは完全な「選択の自由」ではなく、命令と禁止、権力者の我が儘の世界である。

経済的自由とは経済的煩勞からの自由ではなく、あくまでも選択権を前提にした、責任を負う経済活動の自由でなければならない。

3. 全体主義への道

- (1) 以上のような吟味を前提に、われわれが選択すべきは「各人がその受け取るに値するものを、ある絶対的にして一般的な正当性の標準にしたがって得るところの体制か、個人の分け前が一部分、偶然か運不運によって決まる体制かのいずれかではなく、少数の意志によって、誰が何を得るかが決められる体制か、そのことが少なくとも一部分は当該個人の能力と企業心に、一部分は予見しがたい事情に依存している体制か」である。

後者を選択する。

それは計画化が唯一つの手に完全な支配権を委ねることを防止する手立てを持たないからである。

計画化を主張するナチスと社会主義者が経済と政治との人為的分離に共通に反対しているのは、経済に対する政治の優位を意図していること、一つの権力が個々人の地位に対して完全な権力を樹立することを目的にしている。

その意味においてファシズムと社会主義との闘争は同じ見解を前提にした上での抜き差しならない対立に他ならない。

「ナチズムの社会主義的起源」

- (2) 最低生活の保障の必要性を認めるが、独立の理想に対する保障の理想の「勝利」には自由に対する脅威が潜んでいる。

実際、ドイツはこの勝利によって自由を物笑いにする社会を作り出したのであった。

計画化は結局のところ目的に対して同じ見解を持つことなしには機能せず、従って、宣伝であれ強制であれ、その手段はともかくとして、教義の押しつけと「画一化」、自主的判断の放棄、自由の喪失と不可分の関係にある。

(3) ドイツ思想の全体主義、社会主義への傾斜を検討。

「われわれの中の全体主義者」

英国の思想的状況が20年、30年前のドイツの状況に類似している。

アクトン卿やダイシー、そしてグラッドストーンは忘れられる一方で、真摯な理想主義者や高い知性の産物の中に全体主義への道が潜んでいるという。

ケインズ、E・H・カー、ラスキなどは...

マンハイムは。

(4) 計画化に対して市場を弁護。

「市場という個人的関係から遊離した力に人々が屈服したために、過去の文明は初めて可能になったのであって、これなくしては文明の発展は不可能であった」。

市場への屈服にとって代わりうるものが実は「他の人々の権力に屈服すること」であるということを理解していない人間が多すぎる。

その結果、遙かに有害な拘束に自ら入り込む危険性が出てくる。

戦争のように、自由な社会が単一目的に従わなければならない局面はないわけではないが、それは自由のために払う対価に他ならない。

このことと戦争の時になさざるを得なかったことを基準にして、平和の体制を考えるとこれは全く違ったことである。

そして今や戦後体制を考えるべき時だ。

[コメント]

これからの世界や日本のかたちをどのように考えたらよいのか。現在最も批判されているのがこのハイエクで、最も賞賛されているのがケインズであるが、それで世界に、日本に、地域

社会に未来はあるのか。このような時にこそ、もう一度ゆっくり読み直すべきはハイエクの「隷従への道」。佐々木先生の本書はよくハイエクの考えを紹介。見事としか言いようがない。

- 2009年7月18日林明夫記 -